

## 若齢ネコの卵巣に発生した悪性性索間質細胞腫瘍の1例

○大川内充輝<sup>1</sup>、二瓶和美<sup>1,2</sup>、長峯栄路<sup>1</sup>、小柳圭太<sup>3</sup>、坂大智洋<sup>4</sup>、内田和幸<sup>5</sup>

<sup>1</sup>サンリツセルコバ検査センター、<sup>2</sup>日本動物高度医療センター、<sup>3</sup>どうぶつ病院 JET、<sup>4</sup>新潟動物画像診断センター、<sup>5</sup>東大獣医病理

**【はじめに】**ネコの卵巣腫瘍は非常に稀で、過去に性索間質細胞腫瘍、黄体腫、未分化胚細胞腫、奇形腫などが小数報告されているのみである。今回、若齢ネコに発生した機能性卵巣腫瘍を病理学的に検索したので概要を報告する。**【症例】**雑種ネコ、4ヶ月齢、雌。腹囲膨満を主訴に受診。右卵巣に4×5×6cm大の腫瘤が認められ子宮卵巣が摘出された。術中に確認された後大静脈近傍の播種病変は摘出されなかったが、術後に血中プロゲステロン濃度の高値が認められたため、播種病変を切除したところ血中プロゲステロン濃度は顕著に低下した。その後、右側の水腎症を発症し摘出された。卵巣腫瘍および播種病変を病理学的、免疫組織学的に検索した。**【病理的所見】**右卵巣は腫瘍に置換され、腫瘍巣では黄体細胞様細胞の充実性増殖巣と卵胞上皮（顆粒膜細胞）様細胞のシート状／柵状増殖巣が混在していた。播種病変には黄体細胞様細胞の増殖のみが見られ、同細胞間には小型の紡錘形細胞が混在していた。腎臓への腫瘍の転移はなかった。免疫染色では、原発巣の黄体細胞様細胞と卵胞上皮様細胞の多くはinhibinおよびprotein gene product 9.5 (PGP9.5)の一方あるいは両方に陽性であった。播種病変では、黄体細胞様細胞はPGP9.5陽性、inhibin陰性であった。また同細胞の間にみられた小型紡錘形細胞は両抗体に陰性であった。**【考察】**腫瘍細胞は、形態的に黄体細胞と卵胞上皮細胞への分化が認められた。免疫染色では細胞形態に関わらずinhibinおよびPGP9.5の両方に陽性を示す細胞が多数認められた。腫瘍細胞は脈管浸潤が強く、播種も伴う悪性腫瘍であるが、腫瘍細胞にはホルモン産生が認められ機能性腫瘍であった。ヒトでは小児の卵巣腫瘍が報告されているが、その多くは胚細胞腫瘍、表面上皮由来腫瘍、奇形腫である。若齢猫における卵巣腫瘍の発生は過去に報告がなく、機能性かつ悪性の性索間質細胞腫瘍であり、非常に稀な症例と思われた。(780文字)